

阿南光マンダラドーム



マンダラ（曼陀羅）は、サンスクリット語で円や集合という意味をもっている。特に円は完全無欠なかたちとしてマンダラの基調となる。それは森羅万象の实在を想起させ、この世の人間の存在をあらわすという。聖と俗、すなわち真理の世界と現象の世界が重ねられ、一体となった図像ともいえよう。マンダラのかたちは、古くからアジア一帯で描かれ、私たち日本人の宇宙観として心の奥底に息づいているだろう。ここ、四国は空海を開祖とする密教の郷であり、巡礼の地として徳島がその発点となる。お遍路さんは四国を宇宙の縮図に見立てて、右回りに寺々を訪ねるが、マンダラも同じく右回りに図像が展開する。つまり、四国は壮大な一枚のマンダラ世界そのものである、と見立てることができるだろう。

世紀を象徴する光によって、その壮大なマンダラ空間を阿南の地に現出しよう、というのが今回の光のまちづくりイベントの企画主旨である。約50万個のLEDはあたかも砂絵で描かれたマンダラ画のように微細なディテールをもちながら、命ある輝きを放ち、明滅するだろう。それらを飾るジオデシック・ドームは、天球をイメージしている。

直径12m、高さ6mというサイズは、地球の直径の約百万分の一から導きだし、マンダラと呼応してひとつの宇宙を形成するよう意図している。イベントに訪れた人々は地上4mの中空に浮かび、三基直列した半球の下を、夜空を見上げながら通過していく。それは満天に輝く銀河系を眺めるプラネタリウムのような視覚的な効果だけでなく、体全体が光りに包まれるという、身体的な空間体験を生み出す装置になるだろう。古代からの図像と最先端の技術である光とドームによる、この新しいページメントによって、清々しい感動と心の浄化をもたらすことができれば幸いである。

（板東孝明）